

夏休みに絵を描こう！ ー美博コレクション作家からのアドバイス

川原百合恵



1



2



3



4

図1～3：伊藤継郎の描画風景
（伊藤継郎『油絵入門』保育社
1967年 pp.42-43より転載）

図4：嶋本昭三の描画風景
第2回具体美術展（東京・小原会館）
での公開制作（写真提供：大阪中之島
美術館）

註

- (1) 伊藤継郎『油絵入門』保育社、1967年 pp.26-27。
- (2) 前掲書、p.42。
- (3) 嶋本昭三『じぶんも知らないじぶんの絵』ぬ書房、1977年。
- (4) 嶋本昭三「いたずらをしましょう」『きりん』第9巻第2号（1956年2月）pp.18-21。

夏休みに入りましたね。学校の宿題などで絵を描いてみようという方も多いのではないのでしょうか？今回は、当館の所蔵作家たちが残した言葉とともに、彼らが提案する絵の描き方を紹介します。参考にいただければ幸いです。

はじめに「ものを見て描く」スケッチ、写生について、伊藤継郎（いとうつぐろう 1907-1994）の残した言葉とともに考えてみましょう。

まず、描くもの（モチーフ）を決めます。伊藤はモチーフの選び方について、技法書『油絵入門』（1967年）の中で「何を描こうかーなどとことさらにこって考える必要はないのです。あなたの身のまわりにある、あなたの好きなものを組み合わせてやってごらんさい。（中略）好きだからこそ、描く気になれるのです」⁽¹⁾と述べています。そのモチーフに愛着を持てるかどうか大切です。身近なものや人、旅先の風景、動物園や水族館に行ってみるのも良いですね。

モチーフを決めたら、よく見て描いていきます。鉛筆を持ってよく観察すると、ただ見ているだけでは気づかないモチーフの特徴—意外に頭が大きい、目が離れている、など—が発見できます。それらを紙の上に記録していくように、新鮮な気持ちで描きましょう。

次に着彩です。例えばシマウマであれば白と黒、と決めつけず、灰色や黄色がかかった部分、薄い紫色の影の部分など、繊細な色を探す気持ちでモチーフを観察し色のバリエーションを作りましょう。色を塗るときには筆以外の道具も使えます。伊藤は壺を描くとき、ペインティングナイフやマッチ棒、クシなどで、絵具を盛り上げたりけずったり、チューブから直接つけたりしています（図1～3）。壺のざらざらした質感を表現するためです。「自分が描き表したいと思っているものを描くのに一番適切な方法を選んだらよいのです」⁽²⁾と語るように、皆さんもモチーフの特徴にあわせた道具や塗り方を研究してみてください。

続いて「具体的なモチーフを見ずに描く」抽象絵画という絵もあります。嶋本昭三（しまもとしょうぞう 1928-2013）は『じぶんも知らないじぶんの絵』（1977年）という本の中で、抽象絵画のいろいろな描き方を紹介しています。車のおもちゃにペンをくくりつけ、囲いをした紙の上を走らせる方法や、絵具で色をつけたシャボン玉を紙の上で破裂させて描いたり、クシャクシャにした紙のしわに形を見出して描いたり。「えのぐ」としてチョークやソース、口紅、ビール瓶のふた、煙、音などが使え、はぶらしやスポンジ、コマ、水鉄砲、ローラースケートなども「ふで」になる、と紹介しています⁽³⁾。

嶋本自身は絵具を瓶に詰め、画面に投げつけて割り、絵具を飛び散らせて描く方法をあみ出しました（図4）。嶋本が所属していた芦屋発祥の美術グループ「具体美術協会」のメンバーも、足で絵具を伸ばして描いたり、枠に張った紙を全身で突き破って作品とするなどの新しい描き方を次々と発明しました。絵具と筆による普通の描き方をしない、何を描くというわけでもない絵画では、絵具や紙そのものの存在感が増して作品となります。このような、誰も見たことのない新しい描き方を考えてみることも、絵の研究です。嶋本は、おもしろい方法によって、見た人に『「ばくもやりたいな」と感じさせる事が出来たらそれはすばらしいげいじゅつです」⁽⁴⁾と述べています。

伊藤の描く絵からは、モチーフの質感や伊藤がそのものに対して持っていた愛着が伝わってきます。嶋本ら「具体」メンバーの作品を見ると、作品を作る方法の新しさに驚いたり、自分もやってみたいと思うこともあるでしょう。このように作品を通して、作者と見る人の間に感動や共感が生まれることが、創作の醍醐味のひとつです。ぜひ描くことや作ることの楽しみを、友達やご家族と共有してくださいね。

（かわはらゆりえ 芦屋市立美術館学芸員）